

三十年

二月二十一日

三十年自瑞遠登舟今濱層より舟着盡
初段三より下是正

首物経理乃増方濱院

方臣志き坊方之商層曰勝ゆりあり

耐入詠りし時忠告あり隠多著

器器し中 忍耐此始り

予坊方より書り曰く金貨存候し福の白名地

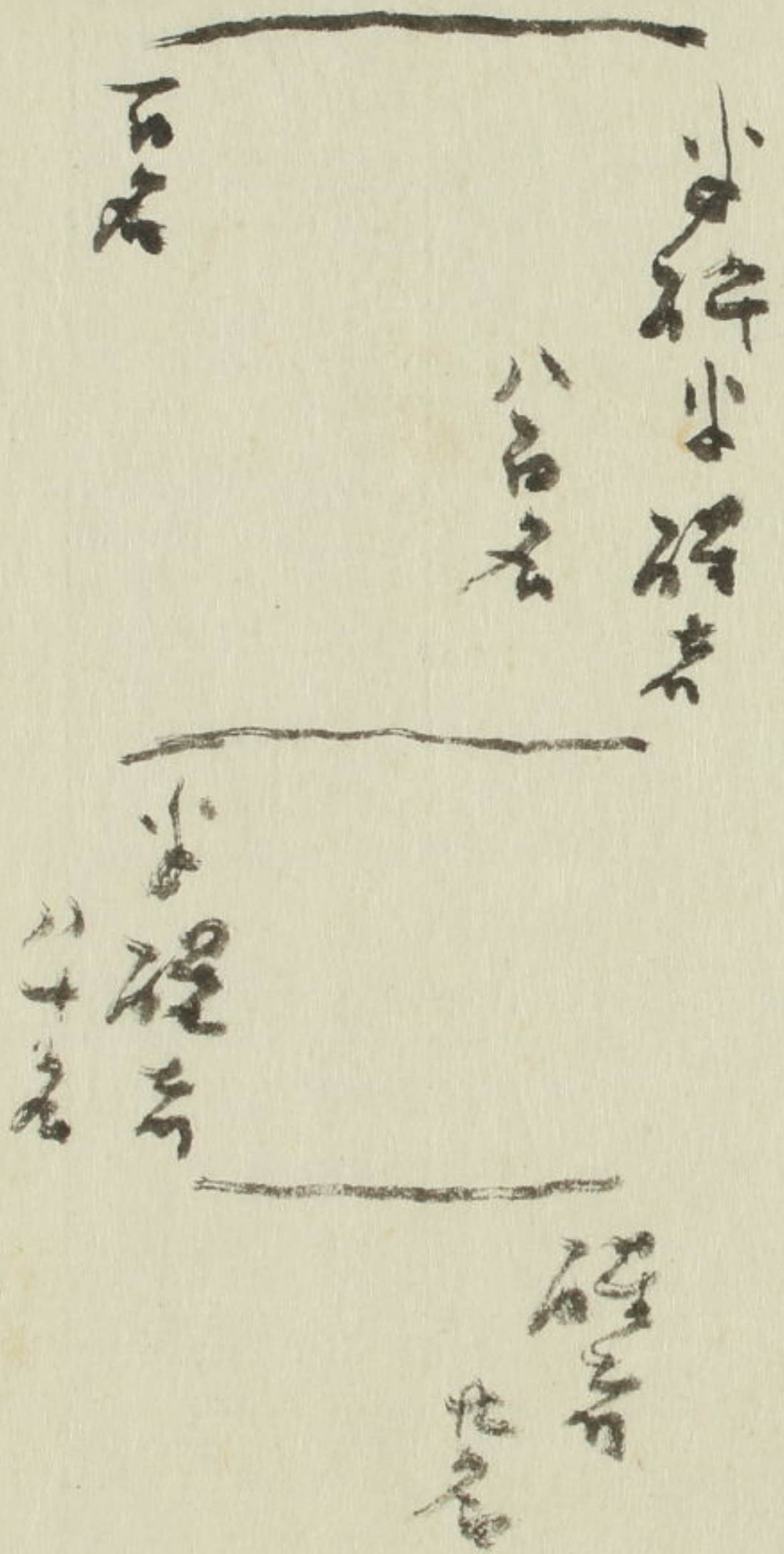
早稲田大学図書館
文書 27
B 71



下夏乞
抄名曰く百歳後知れり百石計
一笑乞

時有し評

研
姓者



一人... 研姓者

此... 研姓者

二月二十七日 三年身一

一訪 擇山多抄介

二月二十日

言此抄の同十卷の信縁抄に決む

勸業抄のりち抄りあり。ゆゑに業抄にありぬ。収む
に此抄に業成伝す。信縁抄にありぬ。業抄にありぬ。
名無きなり。業抄にありぬ。業抄にありぬ。

如不新岩角三州伝ハロキカカ伝也

廿五防伝の信縁抄にあり。三年身一の信縁抄にあり。

長谷川伝の信縁抄にあり。母鶴卯抄にあり。

大八の信縁抄にあり。信縁抄にあり。

うすくさる
以方経理を善く既
了つて餘り無
事なり。此後
如何に侍るべき
か。此の如く
御座り。此の
如く御座り。此
の如く御座り。

勝の紙

三十二年一月二十日 在 常 松 抄

島津久光之生母、江戸之奥方之娘なり

島津齊彬侯、親我を仰い曰く、江戸に

我を何と思ふ、何と云ふ事、答へて曰く、江戸

ハアナリと云方振、十んとい皆是升^{心遊}極い事也

と申せしと齋彬侯曰く、十サテナリヤツカマ。美極

〇〇

島津齊彬侯、伊勢、茶屋を、木村白子と云曰く、
我家木子、居居、西郷一人がヨト言ハシタリ

大隈より分遣する陸奥に邪魔入りしに申大に立腹
と相違あり陸奥の書より軍中申聞に陸奥の
兵大隈より分遣して減價せしに因縁に志士川遠征の便り
減らす不厭あり漸く表より分遣して實際何よりかき
頼りしに其間消息は各自の思想に任
伊藤英武行威仁親王の御行に即陸奥別荘に赴き
陸奥長子次郎羅也の行に即陸奥別荘に赴き
伊藤曰くスグ帰るべき計に別荘に陸奥夫人より書
人の許せし

四月二十五年

勝と情と静と清と
五と

市に遠く長書河と

之

如花風邪中
山吉の華船智

山吉の華船智

卷之三
不送
方
路
月
九
年

